イタリア理想主義の葛藤

The struggle in Italian Idealism

中　川　政　樹
Masaki NAKAGAWA

要旨

イタリア理想主義の代表的思想家として広くその名を知られているベネデット・クローチェ（Benedetto Croce, 1866－1952）とジョヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile, 1975－1943）は、相互協力によって新しい観念論哲学の体系を構築して当時の思想的諸潮流に論戦を挑み、イタリア思想史上他に例をみない影響力を獲得したのであった。しかし、両者がそれぞれの思想体系を確立していく過程で、さまざまな理論的相違が顕現することになった。そして、相対立する二つの理想主義理論が展開されることになったのである。しかし、両者の友愛と知的協力関係は、理論的対立の深化にもかかわらず、ファシズム台頭期まで続いた。そこには何があったのか。本稿は両者の連帯が辿った 1910 年代の複雑な過程の詳細を明らかにし、その理論的意味を考察する。

キーワード：イタリア理想主義、ジェンティーレ、行為主義、クローチェ、精神哲学

はじめに

1896 年６月、若き哲学徒、ジェンティーレは、『ピサ高等師範学校年報』《*Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa*》に載せた論文の抜刷 (1) をクローチェに献呈した。この論文が高く評価され、彼の知遇を得て以来、両者の友愛と連帯による知的交流が始まった。この交流は両者に大きな成果をもたらした。クローチェは、９歳年少のジェンティーレに未知の学問領域への目を開かせ、逆に、早くから哲学的陶冶のあったジェンティーレは、クローチェをより厳密な哲学観念の理解へと導いたのであった。

彼らは、深い友愛に支えられた知的協力よって理論活動に勤しみ、理想主義（Idealismo）と呼ばれるイタリアにおける新しい強固な観念論、すなわち、クローチェは「精神哲学」（Filosofia dello spirito)、そして、ジェンティーレは「行為主義」（Attualismo）あるいは「行為的観念論」（Idealismo attuale）というそれぞれの理論体系を構築した。1903 年にクローチェのイニシアティヴによって、理想主義の機関誌ともいうべき『ラ・クリティカ』《*La Critica*》誌が創刊された。彼らは、同誌を武器に当時隆盛を極めていた自然主義、実証主義、唯物論等の思想的諸潮流を批判し、19 世紀末から 20 世紀初頭のイタリア学術・思

(1) Delle commedie di Anton Francesco Grazzini detto il Lasca, in《*Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa, Filosofia e filologia*》, vol. XII (della serie vol. XIX.), Pisa, Tip. Nistri, 1897 (in estr. 1896), pp.1-30.

想界に絶大な支配権を確立したのであった。

とはいえ、彼らの知的協力関係は、けっして順調・平坦なものではなく、その当初から少なからぬ意見の相違や理論的対立を内包していた。彼らは、それを熱心な意見交換や相互批判によって解消する努力を重ねることによって、連帯と協力関係を維持していた。しかし、ジェンティーレが、「精神哲学」(2) の真髄である「区分」(distinzione) の概念を否定する「行為主義」の理論形成を推し進める過程で、両者の理論的対立はそれぞれの支持者や弟子たちを巻き込んで、もはや覆い隠せないまでに拡大していった。1913 年、クローチェが、ジェンティーレの弟子たちを非難する「行為的観念論について」(Intorno all'idealismo attuale.) と題する公開書簡を『ラ・ヴォーチェ』《*La Voce*》誌に発表して (3)、それまで私的な議論や手紙による相互批判の範囲内にとどまっていた両者の対立が広く知られることになった。

1924 年 10 月を最後に 1896 年 6 月以来、約 29 年間に及ぶ手紙の交換が止まり、両者の関係は断絶に向かう。そして、1925 年、それまでファシズムに対して是々非々の態度をとっていたクローチェが、反ファシズムの立場を鮮明にしたことによって、いまやファシスト文化界の重鎮となったジェンティーレと政治的敵対関係に入ることになったのである。そして、前者はファシズムに反対する自由の旗手として、後者はファシズムのイデオローグとして、相対立する陣営に身を置くことになる。

しかし、当初、理論的相違は、両者の個人的な人間関係にあった友愛と連帯に影響を及ぼすものではなかった。彼らの交わした書簡には、理論的相違を抑え両者の関係をこれまで通りに維持する努力が示され、家族を含んだ友好的な関係が継続していた。なぜなら、彼らはお互いに相手を必要としていたからである。その態様はどのようなものであったであろうか。理論的相違や対立を抱えながらも、最後まで友愛と連帯を守ろうとする両者の関係のなかには、興味深いドラマがある。

小論は、「行為主義」の体系が構築される時期、とりわけ 1910 年代のジェンティーレとクローチェの知的な交流と理論展開に焦点を当て、先のような両者の相互関係に潜むアンビバレントな関係の解明を試みるものである。

１．クローチェとジェンティーレの理論的亀裂

1900 年、ジェンティーレは、ナーポリのヴィットリオ・エマヌエーレ高等学校 (liceo Vittorio Emanuele) に哲学教師の職を得て、教師としての最初の赴任地カンポバッソからナーポリに移った。さらに 1903 年からはナーポリ大学で哲学理論の講義を担当すること

(2) 「精神哲学」については、『表現の科学ならびに一般言語学としての美学』(*Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*. 1902)、『純粋概念の科学としての論理学』(*Logica come scienza del concetto puro.* 1905)、『実践の哲学－経済学と倫理学』(*Filosofia della pratica. Economia ed Etica.* 1908)、『歴史叙述の理論と歴史』(*Teoria e storia della storiografia.* 1915) の「精神哲学四部作」、その他を参照。

(3) Intorno all'idealismo attuale. I. Misticismo ed idealismo. II. L'errore e il male in quanto realtà ne《*La Voce*》, V, 1913, 13 novembre 1913, pp.1195-1197.

になった。ナーポリに居住した 7 年間はカンポバッソ時代と違って、日々、クローチェと直接対話できる環境のもとで、哲学理論の研究を深める機会を得たのであった。その間、クローチェが 1903 年に創刊した『ラ・クリティカ』誌や、1905 年にラテルツァ社から刊行された『近代哲学古典集』《*Classici della filosofia moderna*》などへの執筆および編纂活動などへの参画を通じて、クローチェのよき協力者として研究活動を行った。『ラ・クリティカ』誌への執筆では、彼は主に哲学や教育に関する分野を担当したが、彼の書いた論稿はいずれもクローチェを大いに満足させるものであった。それゆえ、瞬く間に彼の絶大な信頼を得て、同誌の共同編集者・執筆者として、また、彼の研究・文筆活動の相談相手として、欠くことのできない存在となった。ジェンティーレの助力なしには、のちに伝えられるような『ラ・クリティカ』誌の成功はなかったと言ってよい。

両者のそれぞれの出自や気質は著しく異なっていた。すなわち、クローチェは、ナーポリの土地地主である資産家の家に生まれた。その家系には、叔父に自由主義右派の政治家シルヴィオ・スパヴェンタやナーポリ・ヘーゲル派に属する哲学者ベルトランド・スパヴェンタらが連なり、広くヨーロッパ文化に彩られていた。彼は、父の豊かな遺産を受け継いで、生涯生計を立てるための職に就くことなく、研究と文筆活動に勤しむことができたため、鷹揚さと優雅さを漂わせていた。他方、ジェンティーレは、シチリア西部の田舎町カステルヴェトラーノで薬局店主の家に生まれた。その地域では比較的豊かな中産階級に属する家庭であったとはいえ、10 人兄弟という子沢山のため、家計はけっして余裕のあるものではなかった。それゆえ、彼は、研究活動や生計のために、クローチェからさまざまな経済的援助を受けたのであったが、シチリア人としての自尊心が高く、厳格かつ辛辣な側面を持っていた（4）。

このような対照的と思える違いは、両者の知的交流になんら障害となることはなく、彼らの間には、1896 年の出会い以来（5）、年の差を越えた兄弟愛（affetto fraterno）とも言うべき友愛と知的連帯が生まれた。彼らは、互いに補い合ってそれぞれの理論形成を行った。クローチェは 1900 年代初頭に「精神哲学」の体系を構築したが、ジェンティーレは、クローチェに美学の面での伝統的立場の再検討を促し、現代哲学への彼の最初の独創的貢献となった芸術・表現に関する理論へと導いた。その後、哲学と歴史の同一性という絶対的歴史主義の基本的等式の確立を助けたのである。

他方、クローチェは、マルクス主義の研究に始まるジェンティーレの一連の研究課題について、ピサ高等師範学校で恩師ヤーヤの講座で知ったよりも広い哲学の地平へと導き、

---

(4) 彼らの生涯等について、Nicolini, F., *Benedetto Croce*, Torino, 1962. De Feo, I.,*Benedetto Croce e il suo mondo,* Torino, 1966. Colapietra, R., *Benedetto Croce e la politica italiana,* vol.ⅠeⅡ,Bari, 1969. Turi, G.,*Giovanni Gentile. Una biografia.* Torino, 2006. Romano, S., *Giovanni Gentile. La filosofia al potere,* Milano, 1984. Di Lalla, M., *Vita di Giovanni Gentile*, Firenze, 1975. Suppini, R., *Giovanni Gentile. Ideologo del fascismo*, Cremona, 1976.を参照。クローチェとジェンティーレの対立と連帯の相互関係については、Jacobelli, J., *Croce Gentile, Dal sodalizio al drama,* Milano, 1989.　Coli, D., *Giovanni Gentile.* Bologna, 2004.を参照。

(5) 拙稿「クローチェとジェンティーレの知的交流に関する小話」『福祉文化』５号、2006 年を参照。

19 世紀イタリア思想史の執筆を始めとする哲学史研究を援助した。両者はこの相互協力によって、単独ではなしえなかったであろう多くの成果を挙げたのであった。

彼らは、相互批評・批判に触発されて、それぞれの理論体系を修正・完成したのであり、その意味で相互に補完的競争者であった。すなわち、「精神哲学」は、ジェンティーレの批評を克服することによって補強され、逆に、「行為主義」は、「精神哲学」を批判的に超克する意思なしにはありえなかったのである。こうして、彼らは、『ラ・クリティカ』誌において、理想主義の理論に基づく論文・評論の執筆を通じて、共同して論敵に戦いを挑み、イタリアの知的世界を支配するという壮大な計画をおし進めた。これによって、同誌は、この時期のイタリア文化界で最も挑発的で戦闘的な雑誌となり、彼らは恐るべき文化の戦闘者、革新者になった。

しかし、前述のように彼らはけっして一枚岩であったわけではない。その当初からあった意見の相違や理論的対立は、彼らがその理論を展開する過程で、とりわけ、ジェンティーレが「精神哲学」の「区分」の概念を否定して、「思考と行為の統合（unità）」を唱える理論体系を構築するなかで拡大していった。それは、1903 年 2 月にジェンティーレがナーポリ大学での哲学講義で行った「観念論の再生」（La rinascita dell'idealismo.）と題する開講講演で表面化した[6]。この講演で、彼は観念論における「精神と自然の統合」を主張したのであった。そこでは、行為（atto）という言葉はいまだ使われていなかったが、「精神と自然との統合」は、数年後に彼の基本的概念となる「思考と行為の統合」に先立つものであった。

1906 年、ジェンティーレは、シチリアのパレルモ大学哲学史講座の教授として招聘された。クローチェと遠く離れることになったが、両者は疎遠になったわけではなく、『ラ・クリティカ』誌への寄稿や叢書の編纂などの共同事業は、手紙の交換[7]や折に触れて相互に訪問しあうことで、これまで通り継続された。そのことは、他方で、ジェンティーレにとって、ナーポリでの日々の親しい交流のなかでは難しかった自他の思想の相違点を明確にし、独自の理論形成を行うことを可能にするという効果をもたらした。彼は、1906 年から 14 年までの 7 年間パレルモ大学で教鞭をとったが、この期間、彼自身の理論体系を大筋において確立し、また、多くの弟子たちを育てることによって、その後のイタリア思想界に大きな影響を及ぼしたジェンティーレ学派ともいうべき一大シューレを作り上げたのであった。こうして、ジェンティーレはパレルモ時代に彼独自の理論体系を構築していったが、それはクローチェからの思想的独立を意味し、理想主義の内部で理論の相違が時とともに明らかになった時期であった。

---

(6) Gentile, G., *La rinascita dell'idealismo*, Napoli, 1903, pp.7-22.

(7) 両者の交わした手紙は、書簡集として公刊されている。Croce, B., (a cura di Alda Croce), *Lettere a Giovanni Gentil*（*1986-1924*）, Milano,1981.（*Lettere a Gentile* と略記） Gentile, G., (a cura di Simona Giannatoni), *Lettere a Benedetto Croce*. Firenze, Vol. I, 1973. Vol. II, 1974. Vol. III, 1976. Vol. IV, 1980. Vol. V, 1990.（*Lettere a Croce* と略記） また、その出版の経緯については、Spirito, U., Lettera aperta a Benedetto Croce. in《*Giornale critico della filosofia italiana*》, 1950, fasc. Ⅰ. rist. in Spirito, U., *Giovanni Gentile,* Firenze, 1969, pp.76-93.を参照。

その相違は、次いで、芸術と芸術批評の関する見解に表れた。ジェンティーレは、1907年に『ラ・クリティカ』誌に載せた論文の美学に関わる論述で、自己の哲学を思考する哲学者は、作品を創る芸術家と同じ状況にある。創作中の芸術家と思考中の哲学者には、実質的に違いは無いと論じた(8)。そして、思考と創作は、同一の精神活動であると結論づけたのであった。精神活動の区分を行い、芸術の精神過程と芸術批評の精神過程を峻別したクローチェは、この主張に不快感を覚え、私信を送ってこの主張を改めることを求めた。両者の手紙による対話は双方意固地なままに溝が埋められず、近々再会した際に話し合うということで事態は収束された(9)。

さらに、同様な不一致は、哲学と哲学史の問題について1907年に交わされた手紙のなかで顕現した。ジェンティーレによれば、哲学的な思考を行うためには、過去の哲学を一定の歴史的順序に従って配列し、再構築しなければならない。過去の哲学に対して行った判断は、すでに歴史的序列の中に含まれている。それゆえ、哲学（理論体系）と哲学史（過去の理論体系）は同義語であって、その区別は経験的なものでしかない(10)。こうして、あらゆる哲学史（過去）は、哲学者が自己の思想を実現する行為のなかに包含され、他者の思想を理解する行為と自己の思想を思考する行為との間の区分が取り除かれた。これは、彼が数年来練り上げてきた観念であった。

クローチェには、それは最も常識的な区分の除去であり、明らかな混同と思われた(11)。クローチェの求めに応じて、ジェンティーレは『ラ・クリティカ』誌に書いた論文の原稿を修正したが(12)、この修正は、両者の理論的差異を埋めるものとはならなかった。哲学と歴史の関係の問題は、1907年1月の開講講演の中心テーマであり、哲学と歴史の理論の中核となるものであったのである。クローチェは、その講演原稿を読んで、両者がヘーゲル弁証法、とりわけ区分や対立物の統一について共有しているものと考えていた理解がすでに消滅していることに驚いた。それゆえ、彼はジェンティーレに、もし「議論を開講講演の口頭あるいは断片的メモの形式でなく、論理学や美学として体系的な論文で展開するなら、その諸原則のなかのなにかを訂正せざるをえない困難に遭遇するだろう」と忠告した(13)。

ジェンティーレは、彼の忠告を受け入れ、「そのうち私の思想が成熟して、変わることを望む」として(14)、開講講演の原稿をお蔵入りさせた。しかし、彼は、ほんの一寸だけ時間を稼いだに過ぎなかった。翌1908年、それは『リヴィスタ・フィロソフィカ』《*Rivista filosofica*》誌に発表されたのであった(15)。こうして、彼らの文通のなかで、区分の問題

---

(8) Romano, *op.sit.,* pp.143-144.
(9) *Lettere a Croce*, III, n.375, p.20. 後述のように、このような一時的な棚上げが繰り返されたのであった。
(10) *Lettere a Croce*, II, n.367, p.339.
(11) *Lettere a Gentile,* n.291, p.219.
(12) ricennsione a un libro di W. Windelband, ne《*La Critica*》, V, 1907, pp.146-151.
(13) *Lettere a Gentile*, n.299, p.232.
(14) *Lettere a Croce,* III, n.379, p.25.
(15) Gentile, G., Il concetto della storia della filosofia,in《*Rivista filosofica*》XI,1908, pp. 421-464. ora in Gentile, *La riforma della dialettica hegeliana,* Firenze, in 3aed., 1953,

が対立的なテーマになっていった。ジェンティーレは区分をその同一行為の内部に帰せようとし、逆に、クローチェは芸術と芸術判断、哲学と哲学史、経済と倫理などの区分の必要性を執拗に強調したのであった。しかし、この場合も、芸術と芸術評価の関係に関する以前の議論と同様に、近い時期に会って再整理されるべき不一致の確認で終わった(16)。

クローチェの鷹揚さは、ジェンティーレの主張を押さえ込み放棄を迫ることなく、その争点こそ両者の共同作業に有益だとする寛容を示した。また、ジェンティーレは、クローチェに彼の異論に対する理解を求めながら、決定的な対決を避けたのである。このように、相違や不一致については会った時に話そうということで事態は収拾されたが、両者が訪問し合った際には、いつも『ラ・クリティカ』誌の編集、学術文化界の情報、ラテルツァ社の叢書編纂について話し合うことに終始した。交換書簡での両者の理論的不一致は、当面の課題の背後に退き、また意図的にそれに触れることが避けられて、彼らの人間関係に害を及ぼすものにはならなかった。20 年代に破局をもたらすことになる相違・不一致が明らかになる一方、個人的な関係では、ジェンティーレはクローチェにこれまでの２人称の voi ではなく、より親しい関係を示す２人称の tu で呼ぶよう求めた(17)。クローチェもこれを受け入れ、両者の関係は voi から tu へ移行したのであった(18)。

２．友愛と連帯の亀裂

1911 年の冬、ジェンティーレは，パレルモの哲学図書館で行われた連続講演において、「純粋行為としての思考行為」（L'atto del pensare come atto puro.）と題する報告を行い、クローチェの「精神哲学」の核心である「区分」を否定して、「思考と行為の統合」を提唱する彼独自の理論を公表した(19)。この論文は、「行為主義」の理論体系の骨子を大筋において示すものであった。

彼は、すべての存在が我々の意識のなかにあるとする内在主義の立場から、超越論哲学を批判して、内在的方法(metodo dell'immanenza)の徹底による方法、すなわち、絶対的内在（immanenza assoluta）の方法による内在主義の理論を展開したのであった(20)。内在主義の理論においては、思考なしにはいかなる経験も存在せず、意識なしにはいかなるものも存在しない。したがって、事物は意識に内在すること（意識されていること）によって存在するのであって、それなくして意識の外部に存在すること（現実に存在すること）はありえない(21)。その内在主義の流れを汲むジェンティーレの「行為主義」においても、精神は思考行為そのものであり、思考行為こそ唯一の実在とされたのであった。

クローチェが、「ヘーゲル哲学における生けるものと死せるもの」（Ciò che è vivo e ciò che

---

pp.97-137.（*riforma* と略記）

(16) ジェンティーレは、「お互いに協力してそれを乗り越えてきた。われわれの精神的一致が全く現実的でないということがあってはならない」と書いて、結束を強調したのであった。*Lettere a Croce,* III, n.379, p.29.

(17) *Lettere a Croce,* III, n.380, pp.32.-33.

(18) *Lettere a Gentile*, n.301, p.235.

(19) Gentile, *riforma*, pp.183-195.

è morto della filosofia di Hegel.）において[22]、ヘーゲルの「対立の弁証法」を批判し、「区分の弁証法」(dialettica dei distinti)を提唱することによって、理想主義の弁証法的観念論を確立しようとしたのに対して、ジェンティーレは、『ヘーゲル弁証法の改造』《*La riforma della dialettica hegeliana.*》を著し、前述のような内在主義の徹底による「思考の弁証法」(dialettica del pensiero)あるいは内在の弁証法の確立をめざしたのであった。こうして、「精神哲学」に対立する「行為主義」の哲学が宣言された。この意味することは、ジェンティーレが、クローチェの理論とは一致させがたい自らの理論を確立し、彼から巣立ったことであった。ジェンティーレの体系が到達した理論的厳密性を知って、クローチェは彼らの理論が両立しえないことを悟らざるをえなかった。

1912 年 10 月、彼は、ジェンティーレに「歴史、年代記および歴史的偽」（Storia, cronaca e false storie.）と題するポンタニアーナ・アカデミーで報告するために執筆した論文[23]の草稿を送った。クローチェは、この草稿のなかで初めて、過去の歴史の研究は常に現在の我々の要求、関心そして問題意識に関わっているがゆえに「歴史は常に同時代史」であるという、後世に彼の名を印すことになったテーゼを発表した。

ジェンティーレは、この草稿を読んで喜んだ。なぜなら、クローチェの思想のなかにあった図式的かつ抽象的な「区分」がようやく除去されたと、考えたからである。もし、クローチェが、歴史は我々の内面で我々の要求や問題によって絶えず再生されるものであるがゆえに、常に過去は現在に包摂されるという結論に到達したなら、その延長線上で「思考と行為の総合」を理解すると期待したのであった。しかし、歴史を現在化しながらも、彼の論文のなかで、過去の歴史は「年代記」として、すなわち、余り重要でない事実の一覧表の形で頑固に生き延びていたのである。クローチェは「現在のあるいは生ける歴史」（歴史）と「過去のあるいは死せる歴史」（年代記）との弁証法[24]によって、「区分」の概念を再提案したのであり、ジェンティーレには賛同しかねるものであった。

歴史と年代記の区別は、クローチェにとっては矛盾ではなかった。それは、「詩を理解し判断し…人間の誤りを咎め、正当でない」とする「批判原理の一つ」であり、「悪から善を、醜から美を切り離すことを可能とする道具」であった[25]。こうして、両者の相違や不一致が容易に解消できないことが明らかになると、衝突を避ける方法は、一種の外交めいた

---

(20) 内在主義哲学は、19 世紀末に主にドイツで、シュッペ、ルクレール、シューベルトゾンデルン、カウフマンらによって展開された意識一元論の総称である。それによると、全経験はわれわれの意識に内在するものであり、意識なしにはいかなるものも存在しない。そして、現実的とは意識されているということ、客観とは表象であるとする。したがって、それは、意識に内在するということ（認識＝意識）と意識の外部に存在するということ（存在）を同一視し、前者から後者を説明しようとする哲学と理解される。『哲学・思想事典』岩波書店、1998 年、1193 頁。

(21) Gentile, *riforma, op.sit.*

(22) Croce, B., Ciò che è vivo e ciò che è morto della filosofia di Hegel. ne《*La Critica*》, IV, 1906, pp.410-412. Rist. in Croce, B., *Saggio sullo Hegel seguito da altri scritti di storia della filosofia,* Bari, 1913, pp.3-148.

(23) Storia, cronaca e false storie. in《*Atti dell'Accademia Pontaniana*》, XLII, pp.1-4. ora in Croce, B., *Teoria e storia della storiografia*, Bari, 1917.

(24) *Lettere a Croce,* IV, n.677, p.199.

(25) *Lettere a Gentile*, n.605, p.432.

対応にならざるをえなかった。重大な相違があるにもかかわらず、ジェンティーレは、「この論文のなかに、我々は常に一致することを見てうれしい。大変満足です」と書き(26)、クローチェは「我々の間で完全な一致が喜ばしいことであろうか。…相互の刺激である不一致…」と返信して、不一致を容認したのであった(27)。

その言葉どおり、両者は互いを刺激しあう論文を次々に発表していった。1912 年 9 月、ジェンティーレは、かねてクローチェと相談していたラテルツァ社の教育叢書のために、『哲学としての教育学概要』《*Sommario di pedagogia come scienza filosofica.*》の二巻本を一気に書き下ろした(28)。これは、師範学校の教師用に執筆されたものであったが、のちの体系的著作の先陣となる理論を含む内容のものであった。新学期の 10 月までに刊行するために、彼はその原稿をいつものようにクローチェに批評を求めることなく、急いでラテルツァ社に送った。そして、クローチェには、「あなたの見解を聞きたい幾つかの新しい事柄と体系的改良の試みがあるので、あなたに原稿を送らなかったことが残念です」と書き送った(29)。

クローチェは、11 月に届けられたその本を読んで、それが教育学概要というよりも彼の区分に反対して行為の統合のテーゼを強く論じた哲学書であると判断したが、「強靭で、独創的、示唆に富む」著作であることは認めざるをえなかった(30)。そこで、彼は、「区分の問題は解決していないし、決着もしていない。君の言葉で問題が再燃した」が、「この古い不一致は時が来るまでこのままにしておこう」として、この書が読者には難しすぎると指摘するにとどめた(31)。ジェンティーレが論争的なトーンを避け、抑制的な叙述をしたにせよ、彼はクローチェに対して議論しているように思われた(32)。そして、原稿を彼に送らなかったことは、論争を引き起こしかねない問題を隠蔽する意図的なものであると推測した。クローチェの直感は正しかった。ジェンティーレは、彼の主張がクローチェのそれと衝突することを恐れ、執筆を躊躇したと述べたのであった(33)。

11 月末にジェンティーレがナーポリを訪れ、仕事の計画や編集について打合せを行ったが、いつものようにこの問題に話は及ばなかった。こうして、両者の相違や不一致は解消されないままに、その拡大を避ける方策が重ねられたのであった。両者の交換書簡は、彼らの友好的な家族ぐるみの交際のなかに対立と連帯がいかに同居していたかを示している。それはいったい何故なのであろうか。理論的相違や不一致を抑え、それが外部に流出することを避ける努力のなかに、当時のイタリアの最も挑発的な雑誌の共同編集者として、文化界を征服し改革するという野心的な意図を推し進める連帯の主役たちの顔がみえてくる。

---

(26) *Lettere a Croce,* IV, n.677, pp.198-199.
(27) *Lettere a Gentile*, n.605, p.432.
(28) Gentile, G., *Sommario di pedagogia come scienza filosofica*, vol.I, 1913 e vol.II, 1914. ora in 5aed., vol.I, 1970 e vol.II, 1962.
(29) *Lettere a Croce,* IV, n.672, p.190.
(30) *Lettere a Gentile*, n.606, p.433.
(31) *Lettere a Gentile, ibid.*
(32) *Lettere a Gentile,* n.607, p.434.
(33) *Lettere a Croce,* IV. n. 680, p. 205.
(34) Romano, *op.sit.*, p.196.

もし彼らの相違や不一致が公になり、二つの理想主義理論の存在が明らかになると、その意図は失敗に終わることになったであろう。したがって、相違や不一致を棚上げし共同作業を継続することこそ、両者にとって必要なことであった[34]。

３．行為主義批判

1913 年 11 月、ついに彼らの私的議論や手紙での相互批判の範囲内にとどまっていた理論的相違・不一致が、外部に流出することになった。この年、クローチェはバカンスをエミリア・ロマーニャ州のチェゼーナで過ごしたが、妻のアンジェリーナが体調を崩し、アブルッツォ州のライアーノに移ったのち、気管支肺炎で 9 月 25 日に死亡するという不幸に見舞われた。アンジェリーナの死は、彼の心のなかに大きな空洞をもたらした。これまで以上に仕事に励むことが、悲しみから立ち直るための方策であった。妻の死という不幸の約一ヵ月前の８月 19 日に、すでに彼はチェゼーナからドイツの友人ヴォスラーに次のように書き送っていた。「ジェンティーレは…すべてを自己意識のなかに解消しようとするがゆえに、私の思想とは違うある傾向を彼の思想に取り込んだ。それを議論するために、彼が熟慮して一時的な衝動に走らないことを望む。…その傾向は危険だと思う。なぜなら、すべての対立や区分を砕き、判断、想像、意思のエネルギーを弱め、神秘主義の一形式になるからだ。[35]」

クローチェは、ジェンティーレやその弟子たちが行った批判に不満を募らせ、彼らとの理論的対決を決意したのである。妻の死後彼を襲った憂鬱を振り払うために、ジェンティーレとその弟子たちを批判する論考を書きなぐり[36]、それを公開書簡の形で公にすることにした。両者の対立はついに公開の場に引き出された。彼は、それを『ラ・クリティカ』誌に掲載することは読者に両者が袂を分かったという印象を与えると考え、その不都合を避ける配慮から、プレッツォリーニ（Prezzolini）に依頼して彼の主宰する雑誌『ラ・ヴォーチェ』《*La Voce*》誌[37]に発表することにした。こうして、11 月に公開書簡「行為的観念

(35) *Carteggio Croce-Vossler. 1899-1949.* Bari, 1951, CXXXIX, p.170. このヴォスラーへの手紙は、公開書簡に先立つものである。

(36) クローチェは、ジェンティーレの弟子のオレスターノ、グアステッラ、ファツィオ＝アルマイエル、オモデーオ、デ・ルッジェーロらについて、ジェンティーレへの書簡のなかで度々言及したのであった。ex. *Lettere a Gentile*, n.640, p.452.ed altre. これに対して、ジェンティーレは、パレルモ哲学図書館全体を彼と同一視せず、オレスターノ、グアステッラその他の研究者と彼を区別すべきだと反論した。*Lettere a Croce,* IV, n.719, pp.258-259.

(37) プレッツォリーニは、クローチェとジェンティーレの共通の友人であった。プレッツォリーニ、『ラ・ヴォーチェ』およびクローチェに関しては、小林勝「第一次大戦とプレッツォリーニ」『地中海研究所紀要』第３号、2005 年の研究がある。また、倉科岳志「クローチェと第一次世界大戦　ジェンティーレとの関係を中心に」『日伊文化研究』XLIX, 2006 年は、第一次世界大戦をめぐる両者の関係を論じている。

(38) Intorno all'idealismo attuale. I. Misticismo ed idealismo. II. L'errore e il male in quanto realtà ne《*La Voce*》, V, n.46. 13 novembre 1913 pp.1195-1197. ora in Croce, B., *Conversazioni critiche*. Serie seconda, 5ed., Riveduta. Bari, 1950, pp.67-82.(Misticismo ed idealismo と略記。）

(39) *Lettere a Gentile,* n.640, p.451-452.

論について」（Intorno all'idealismo attuale.）が同誌に掲載された[38]。クローチェとジェンティーレの私的な議論や手紙での相互批判を知らない人たちにとっては、それは両者の関係の歴史的転換ともいうべき出来事と思われたが、クローチェはジェンティーレへの手紙で次のように述べている。「幾人かの人が、私と君との不一致に驚きを表した。しかし、私は、笑いながら、彼らの驚きが私を驚かせたと答えた。なぜなら、この不一致は我々の間には常にあったことであり、なんら障害となるものではなく、それが、正常な協力、本当の友情、平静の状態だったから。[39]」

「行為的観念論について」において、クローチェは次のように論じた。「君たちの行為的観念論は、私を納得させるものではない。私はそれを公言しなければならない。なぜなら、私はこれまでのようにそれを私の内部でのみ、あるいは私的な会話のなかで語り続けることを好まないからである。[40]」

そして、「区分」の問題に関して、「なぜ、私が納得しないか、あるいは、何に私は納得しないか。…君たちは…抽象化された区分ではなく、あらゆる区分に反対しているのだ。なぜなら、君たちにとって区分そのものが抽象なのだから。君たちは、具体的概念（区分における統合）ではなく、概念の無い具体を主張しているのだ。…君たちは、現在性を真に考えることなく、そのなかに内在することを望んでいる。なぜなら、思考することは区分しながら統合することであり、統合しながら区分することだからだ。このことを君たちは現在性を超越することと考えている。[41]」

「もしあらゆる対立物が区別の上に成り立つとするなら、君たちの内在的現在性の原理がもたらす論理的帰結は、対立物の無い不動の現在への内在ということになろう。それは、唯一の実在としての観念や精神の肯定を意味する観念論や精神主義でもなく、精神の諸形式のドラマを意味する歴史でもない。君たちは、むなしく自己を超越しようとする神秘主義である。君たちの歴史的先行者は、カントやヘーゲルでもなく、神学校や神学から出て、もっぱら、統一の宗教的熱望にさいなまれ、他のあらゆる関心を閉ざしたスパヴェンタ、ヘーゲルの解釈についてのスパヴェンタの苦悩こそ本当の先行者である。[42]」彼の判断によると、対立や区分そして弁証法的緊張や歴史性を欠いた不動の現在は、内在的現在性に由来する。これはまさしく神秘主義的立場である。こうして、クローチェは、行為的観念論があらゆる存在を思考の中に包括することによって「区分」を否定し、現実を超越した空虚な世界を描き出すと批判したのである。

「君たちの行為的観念論について心配することは、行為的観念論が現実の対立物への意識のなかに作り出す抑鬱であり、君たちによって全く無用なまでに低められ、あらゆる実在を欠いた誤謬と悪について定める理論に暗に含まれた事実としての事実、行為としての行為への盲従である。[43]」

悪は過去の善、偽は過去の真と考えるジェンティーレとその弟子たちは、思考と行為、

---

(40) Misticismo ed idealismo, p.67.
(41) *Ibid.,* p.68.
(42) *Ibid.,* p.71.
(43) *Ibid.,* p.75.

主体と客体の区別を廃止しようとしただけでなく、善と悪、正と不正、真と偽の区別までも廃止しようとしたのである。しかし、「誤謬はこれを正す真実のなかにでなければ存在しない。…誤謬はそれ自体としては存在しない。悪はそれを悔やみ贖う意識のなかに…悪としてではなく善として存在する。これを矯正し、浄化するプロセスの外では、誤謬は誤謬ではなく、悪は悪ではなく…消極的ではない積極的な行為である。(44)」対立し敵対するものがなくして、悪や誤謬とたたかうことは滑稽である。これが彼らの不一致の核であり、クローチェが同意できない論点であった。それゆえ、彼は、「私は君たちが…理論的・倫理的無関心主義に陥ることを恐れる」と締め括ったのである(45)。

ジェンティーレにとって、クローチェが絶えず弟子たちを攻撃の標的とすることは、彼を直接攻撃することをカモフラージュする方便と考えざるをえなかった(46)。二人の思想家は、彼らの不一致を少なくする意図で手紙を交わしたが、相互に激しい批判の応酬は逆に不一致を先鋭化することに終わった。ジェンティーレは、先の公開書簡への返答を迫られていたが、両者を気遣う共通の友人たちの助言によって(47)、彼は事態を沈静化させる道を選んだ。

彼は、1913 年末に「行為的観念論について、回想と告白」(Intorno all'idealismo attuale. Ricordi e confessioni.）と題するクローチェへの返答書簡(48)をプレッツォリーニに送った。この返答において、ジェンティーレ学派がクローチェの理論への批判を強めているとの被害者意識を払拭させるために、「学派について、ある弟子はそのように思考し、そのように思考しない弟子もいる。したがって、一つの学説を持っているのではない」と釈明した(49)。彼によれば、「あらゆる区分の否定としての行為的観念論」の提唱は、「最近のことではない。…それは、1897 年に書かれた卒業論文のテーゼ以来常に持っていた思想」である(50)。

「主観からあらゆる実在が派生する」という観念論の基調を共にしながらも、彼らの不一致は古くから存在しており、クローチェが認めていたように、それこそがそれぞれの理論構築の推進力であった。さらに、「我々の議論の恒常的な課題」は「区分」の可能性であるが、「相対立する要求」すなわち「あなたの区分とそれへの私の反対」によって、「我々の不一致はより決定的」になった(51)。「あなたは精神の統一を護持し、保証する努力を重

(44) *Ibid.*
(45) *Ibid.,* p.83.
(46) ジェンティーレは、クローチェが「彼の理論を受け入れるときにのみ、若き研究者を評価する」と不満を訴えたのであった。*Lettere a Croce,* IV, n.721, p.261-5. また、スパヴェンタに対する批判や行為主義を神秘主義と決めつけるクローチェの主張は、彼には不快に感じられた。シチリアへの言及もジェンティーレを傷つけることになった。*ibid.,* n.722, p.267.
(47) この頃クローチェよりもジェンティーレに哲学的には近かったデ・ルッジェーロもそれを望んだ。しかし、ニコリーニは、両者の気質が余りにも違っていたので、この不和が解消できないことを理解していた。Romano, *op.sit.*, p.203-204.
(48) Gentile, G., Intorno all'idealismo attuale. Ricordi e confessioni. ne《*La Voce*》, V, n.50, 11 dicembre 1913, pp.1-4.ora ne《*La Voce*》*(1908-1914), La cultura italiana del'900 attraverso le riviste*, vol.III, Torino, 1960, pp.608-625.
(49) *Ibid.*, p.608.
(50) *Ibid.*
(51) *Ibid.*, p.610.

ねることによって、実は、反対をより以上に硬化させた。(52)」あなたは、「私の純粋行為が、生命、感情、意思とも呼びうる」と言う。「…私も一般教育学概要のなかでそう言っている。がしかし、…あらゆる命名に区別がないからではなく、思考によって実在の多様な形式を区分しながら」言っているのである(53)。

また、内在主義に関しては、「出発点を根本から変え、絶対的であるがゆえに何物をも前提とせず、すべてを作り出すあらゆる近代観念論の基礎を強く主張する必要があることを…私はますます確信をしている」。すべてに「先立つものとしての主観は何物をも前提としない。それは古い主体と属性の区分を破壊して、デカルトが発見したような主観である。…私は存在しない、私の思考もしかり。私は私の思考そのものである。それは存在（essere）ではなく過程（processo）である。この過程の外に、自我（Io）が存在しないばかりでなく…何物も存在しない。なぜなら、思考されうるものすべてが、この過程の状態、すなわち、具体的には過程そのものであるからだ」(54)。

こうして、神秘主義や彼の体系の非道徳性への批判は的外れであること、そして、「区分」の概念に起因するクローチェの理論が陥る困難や矛盾を示して、それらは「行為主義」によって解決されると説いたのであった(55)。

この抑制されたジェンティーレの姿勢は、一定の効果をもたらしたように思われた。その原稿は、掲載に先立ってプレッゾリーニからクローチェに送られたが、彼はそれに理解を示す手紙をジェンティーレに送った(56)。そして、彼もクローチェに「あなたの手紙は私の心に真の慰めをもたらした。あなたにお礼を言う」と返信したのである(57)。

しかし、このような手紙の交換は、これまでと同じように理論的相違や不一致を解消するものではないことは明らかである。クローチェの批判が、直接ジェンティーレに対してではなく、表面的には弟子たちに向けられていることの意味は深い。それゆえ、公開書簡を理解するためには、次のことに留意しておかねばならないであろう。すなわち、クローチェにとって、ジェンティーレは『ラ・クリティカ』誌の共同編集者・執筆者、一連の出版事業の協力者として取り替えがたい友人であった。他方、ジェンティーレにとって、クローチェは永年の研究・教育職への求職活動やその後の学術研究のパトロンであった。両者が決定的な破局を避けようとしたのは、十分理由のあることであった。

『ラ・ヴォーチェ』誌でのジェンティーレの返答を受けて、1914 年 1 月、クローチェは再度同じ表題で第二の論文を同誌に投稿した。そのなかで、彼は「生ける私と死せる私との継続的闘争こそ、まさに神秘主義である」と再論したが、「私たちは同じ道にいる。…多

---

(52) *Ibid.*, p.611.
(53) *Ibid.*, pp.617-618.
(54) *Ibid.*, pp.621-624.
(55) 彼は「哲学について、あなたと議論する時、尽きることはない。今回は、残念ながらこれで、止めておきたい」と言って論を収めた。*ibid.*, p.625.
(56) *Lettere a Gentile*, n.642, p.454. さらに、２ヵ月後、クローチェは「再読した。不快ではない」と付記したのであった。*ibid.*, n.643, p.455.
(57) *Lettere a Croce,* IV, n.724, p.271.
(58) Intorno all'idealismo attuale. ne《*La Voce*》, VI, n.1, 13 gennaio 1914, pp.4-15. ora in Croce, *Conversazioni critiche.* Serie seconda, 5ed. Riveduta. Bari, 1950, pp.83-95.

くのことで同意見だ。すべてに一致してきた君と私は、今論じた不一致について再考し続けることで、過去に何度もあったように…別の道をいくらかの期間通った後に、大いなる満足をもって、…同じ道にいることに再び気付くこと」を希望すると述べて、自らが点けた火を消したのであった(58)。

おわりに

これまで論じてきたように、クローチェとジェンティーレは、その当初から理論的な相違・不一致を抱えていたが、それを一種の刺激として、二人だけの私的な議論や手紙での相互批判でそれぞれの理論体系の構築に役立てたのであった。しかし、ジェンティーレがクローチェの精神哲学を批判的に継承する観念論の体系を確立するに及んで、両者の意見の対立はもはやその内部に納まりきれないものになってきた。しかし、彼らは、つねにその決着を遅らせることによって、破局を避け協力関係を維持する道を選んだ。そこには、前述のような破局を避けなければならない両者の事情が存在した。

1913 年は、彼らにとって決定的な年になった。その論争は、それぞれの理論体系の違いと不一致を白日の下に引き出しただけではなかった。相互に理論武装をして相争う関係が公然たるものになって、2 つの理想主義の存在が広く知られることになった。それは、まさにクローチェとジェンティーレの関係の転換を印す事件であった。非理想主義者たちの多くは、両者の断絶とも思われたこの出来事が、理想主義の解体の端緒を示すものと感じた。他方、その断絶は、理想主義の内部にそれを活性化する 2 つの極を作って、理想主義を強化する効果を生み出すようにも思われた。

確かに、論争は、クローチェとジェンティーレの関係の破局を予知させるものであった。また、イタリアの若者たちの知的部分は、彼らの論争に多かれ少なかれ関わって、クローチェあるいはジェンティーレの側に引き寄せられ、とりわけ、ジェンティーレの側に多くの者が組み込まれていったのも事実であった。しかし、彼らの最終的な断絶は、第一次大戦へのイタリアの参戦とファシズムの台頭という深刻な政治過程を経なければならなかった。本稿はもとより紙幅の制約からこれらに言及することはできないが、その検討を次なる課題として論を閉じることにする。